

学校に父親が活躍できる舞台をつくる

秋津コミュニティ ●千葉県習志野市
http://www.akitsu.info/



学校と地域が融合して生涯学習の場に

千葉県習志野市の秋津小学校区では、学校と地域が一体となって生涯学習の実践を進めており、その活動を推進しているのが地域の諸団体が構成された「秋津コミュニティ」である。

秋津コミュニティの活動を幾つか紹介すると、一つには、火曜日午後の正課のクラブ活動がある。教員の他に保護者や地域住民も加わって子どもと同じ目線で活動しており、大人だけでなく子どもも先生役を務めたり、教員と地域住民でクラブの年間計画を作ったりしている。そうした大人たちの学校の授業参画は26にも及び、国語科の授業として読み聞かせ等のおはなし会も行われている。

また、小学校の余裕教室4つと敷地の一部等を

活用し、学校を拠点とした生涯学習の場としてコミュニティルームを開設している。年間を通して朝9時から夜9時まで誰もが無料で利用でき、地域居住の運営委員が鍵を含めて自己管理している。今では40ものサークルがルームを利用し、活動を展開している。

その他、学校に井戸を掘ったり、低学年向けに空き教室を改修してゴロゴロ図書室をつくるなど、どれも父親たちの積極的な参加で実現したもので、地域と学校との融合はますます進んでいる。地域と学校の双方がメリットを得る状態をつくり出すことを「融合の発想」と名づけ、「連携」を一歩進めた形として捉えている。

学校の飼育小屋造りをきっかけに父親たちが参加

秋津コミュニティの活動には、たくさんの父親たちが様々な形で関わっている。

父親たちが学校に関わったきっかけは1991(平3)年に、PTA創立10周年記念事業として飼育小屋を造ったことである。生活科の生き物を飼う授業を充実させるために、学校では飼育小屋を改築しようとしたが、資金の問題などで進まなかった。

参加の輪を広げ、継続するためのコツ

学校という公教育の場は地域の拠点としては最適で、親しみのある身近な学校なので様々な住民が関わることができ、かつ毎年新しいメンバーが



完成したゴロゴロ図書室。写真上はお父さんたちの手で工事中



参加したがってるお父さんに舞台を用意する

秋津コミュニティ 顧問 岸 裕司さん

お父さんが学校や地域に参画しないといいますが、私は、実はお父さんは出たがっていると感じていたので、踊りやすい舞台と脚本を用意したわけです。それも漠然と呼びかけるのではなく、飼育小屋を造るなら建築が得意なお父さん、パソコンクラブをやるならパソコンが得意なお父さんと具体的に呼びかける。すると「自分に言われている」と思うから参加します。どんなお父さんも家庭や地域に自分の居場所を欲しがっているんです。でも強制してはダメですね。

秋津コミュニティの活動は、岸氏の著書『地域暮らし宣言』『学校を基盤にお父さんのまちづくり』(太郎次郎社)に詳しく紹介されています。

当時PTA会長だった岸さんは、デザイナーと建築士の父親の3人でプロジェクトを組み、その3人が声をかけて集めた40数人で、土日祝日を使って4ヶ月で飼育小屋を造り上げた。

それ以後、父親が活躍できる分野「モ・ス・パ」(モノ作り・スポーツ・パソコン)を中心に多様なメニューで呼びかけ、父親たちの参加を進めている。

入ってくる。秋津コミュニティでは、活動の状況を明らかにするために情報公開をして説明責任をきちんと果たすことが、参加の輪を広げるために大切だと考えている。そして強制せず、父親自らが活動を「楽しむ」ようにすること。そうすれば、父親たちは地域に出てくる。

そして、子どもが学校を卒業しても父親が活動を継続するためには、サークルにして恒常的に参加できるかたちにする。仲間づくりができるような運営をすれば、父親たちは「卒業」しない。

学校からの文書は父親まで届かないから、引っ張り出し作戦をする。飼育小屋造りでは上棟式の時に、後ろの方に所在なげにぼつんと立っているお父さんに声をかけて輪の中に入れてしまうんです、名簿に名前や住所を自分で書いてもらって。次の行事の時は、お父さん個人宛に手書きで文章を添えて、家のポストに入れに行く。お父さんは名前を覚えてもらったので、嬉しくなってまた来ます。そうやって仲間に入れる。今時、商売だって待っているだけではダメですから、こちらからちゃんと働きかけないと。

そのうち、会社も大切、家庭も大切、子どもも大切という多面的な見方にお父さんは気が付く。そうすれば黙っていてもそれぞれの部署のリーダーとして育ちますよ、だって元々仕事でちゃんとやってるんですからね。

学校も地域も元気になるろう！

父親パワーで

特集

各地で立ち上がっている「おやじの会」の活動や、学校や地域でボランティア・市民活動などに進んで参加する父親たちの姿がめだっています。父親たちが地域活動に参加することにより、その専門知識や技術を生かして活動に多様性が生まれたり、親子の絆が深まったりと、多くの面で評価されています。本号では、父親たちが地域活動に参加しやすくなるための活動展開やその支援の方法を、活動事例をまじえて考えます。



子どもたちに風車の広場をつくれた父親たち

特定非営利活動法人賀露おやじの会 ●鳥取県鳥取市
http://kankyo20xxld.hp.infoseek.co.jp/

子ども会の科学遊びイベントが活動のきっかけ

鳥取砂丘に近い港町、鳥取市賀露町では、特定非営利活動法人賀露おやじの会が会員のモノづくりの職能・技能を活かした活動を行っている。

会発足のきっかけは、1997(平9)年に地区子ども会で実施した「科学遊びひろば」で、講師や参加した父親たちが一回だけではもったいないと、

会員が持ち寄る課題を楽しく解決

子ども会から発展したおやじの会だと、子どもが大きくなれば親たちのつながりが切れてしまう。仲間だけの会からもっと広げ、事業を継続していきたいと思うようになり、2003(平15)年にNPO法人となった。法人化することにより、地域の様々な課題と関わり活動を発展させていくことができた。

現在の会の活動は、研究機関や環境NPOと協力して市民風力発電所を造る試みの他、科学実験教室の開催など環境問題が中心であるが、県民ミ

毎年何回か地区の子どもたちを対象とした科学教室を開いて活動を継続していった。会の活動はモノ作りが多いので、メンバーは大工、造船業、鉄鋼業、漁師など、モノづくりに関わる「職人さん」が中心になって動いている。

ユージカル劇公演の協力もしており、会のメンバーは大道具や小道具の製作協力の他、役者として関わる人もいる。

会の活動は、「しなければならない」ではなく、会員が持ち寄る様々な問題を「いかに楽しく解決するか」を原則としている。自分の得意分野を発揮できれば、父親たちは達成感を味わうことができ、かつ子どもたちは「すごいな」と尊敬の眼差しで父親を見るようになる。

子どもとの関わりを通してまちづくりを考える

2001(平13)年、町の小学校に一輪車コースの遊歩道とアスレチック施設、小型風車発電機4基と太陽光発電設備「かるっこアスレチック風車広場」(写真上)を造った。子どもたちが自然エネルギーや環境問題を考えられるように、自治会や地元機関から資金協力を仰ぎ、完成にこぎつけた。

申請書などの文書を書いたり交渉したり、という過程の中でつながりができ、いろいろな人にきちんと理解してもらうための事業の進め方を学んだ。この活動を通して、おやじの会は地域の中の環境問題やまちづくりに関わるようになったと

思う。「子どもとの関わり」が、父親たちが地域づくりや町おこしを考える時に大事だと実感している。

将来は、日本海の風を受けて風車が立ち並ぶ賀露ウィンドタウン構想へと、おやじの会の夢は大きく広がっている。



ミュージカル公演に参加



関わってくれる人の能力とやりたいことを大事にする

特定非営利活動法人賀露おやじの会 理事長 藤田 充さん

賀露おやじの会はモノづくりの職人さんとのつきあいが多い。私はあまりでしゃばらず、参加する人が自分から動けるように気を配る、活動の場や雰囲気をつくるということを考えています。

会はいろいろな団体やグループと協力して活動していますが、協力者との関係を続けるのは、何よりも楽しくやることです。賀露は新鮮な魚やカニがうまいところなので、一緒に料理して、みんなで食べたり飲んだりすることも大事です。来れば楽しいなという雰囲気をつくることです。

学校に関わる、子どもに関わるというのは、お父さん本人にとっても幸せなことなんです。だって、子どもが

「お父さん、お父さん」と遊んでくれる時間は実に短い、終わってみるとわずかなものなんです。もう中学生になったら近づいてくれないんだから。一生の中で子どもに関われるのは5~6年くらいでしょう。そんな貴重な時間に、積極的に関わらないなんて、本当にもったいないと思いますよ。

父親が学校に関わるのは、家族にとってもいいことです。母親は自分が学校に行かなくてすむから他のことができるでしょう。子どもにとっては気軽に頼み事ができ信頼できる大人が学校にいることになる。共通の話題も多くなるし、いいことづくめです。

でも一般的には、父親は学校の体育会活動などには活発に参加しても、終わるとビールを飲んで帰るだけとなりがち。子どもに本当に関わろうとするなら、何を切り口にして父親を活動につなげていくか、ということがポイントだと思います。

お父さんの出番をつくって 「社会人間」への転身 を応援しよう

ボランティアコーディネーターに 期待される役割



財団法人 さわやか福祉財団
勤労者マルチライフ支援センター センター長
安村朝昭さん
<http://www.volunteer-net.jp/>

事例に見るように、ボランティア・市民活動に参加する元気なお父さんが増えています。しかし、まだまだちゅうちょすることが多いのも確か。勤労者のボランティア活動や生涯学習など様々な社会活動への参加を支援している勤労者マルチライフ支援センター センター長の安村朝昭さんに、お父さんの地域活動への参加促進とボランティアコーディネーターの役割について聞きました。

Q お父さんが積極的に地域の活動に参加するようになったのはなぜでしょう

何が変化の要因かという、まず、サラリーマンをはじめ働いている多くの人たちの雇用形態の変化でしょう。終身雇用制度が成果主義や能力主義になり、企業人といえども個の確立をしていかないと私生活も会社生活も成り立たなくなってきました。それは「会社人間」から「社会人間」になるということなのですが、しかし目覚めるのはなかなか難しい課題です。

“ボランティア”と名がつくと、従来の福祉のイメージでは何らかの専門性を持たなければならないと考えて尻込みしてしまいがちです。ところが、子どもがいれば学校を土台にして地域の子どもと一緒にあって見たり、育てることが可能なんです。こういう視点に気が付いてお父さんたちも子どもと関わることができると、ボランティア活動も容易になるし、その時に助けになるのが全国でどんどん生まれているおやじの会などの活動ではないでしょうか。

Q どうすればお父さんが参加しやすくなるでしょうか

おやじの会で成功しているところの多くは、緩やかな規則でいつでも時間がある時に能力を発揮できる、ということのようです。会の規則をがっちり固めてしまうと参加しづらくなってしまいますので、参加する最初のハードルは高くする必要はないんです。

また、子どもに連れてきてもらうという方法もあります。子どもの「ちゃんのお父さんは学校に来てパソコンを教えてくださいよ」「サッカーを教えてくださいよ」そして「お父さんはなんで来ないの」という言葉に刺激されて活動している例もあります。必ずしも意識的な人ばかりではなく、せきたてられながら活動している人もいます。それでよく、活動する中で、活動の楽しさや意義をお父さんが気付くかどうかの問題なのだと思います。

忙しければ、メールのやり取りで連絡をすればいいですね、普段からやっていることだから。それで、イベントなどで実際に会ったら、商店街も通勤族もいろいろな業種の人と一緒にあって達成感を味わいながら一杯やるというわけです。そうやっているうちに、指示を待っていた「会社人間」が自分で考える「社会人間」になっていくんです。

Q お父さんの参加は本人や家族、地域社会にとってどのような意義がありますか

本人にとっては地域と連動できること、新しい視点を持つことが大きいですね。そうすると家族の中で共通の話題ができます。土日に仕事をもち帰るか、ごろ寝でテレビを見るのがいいところだったお父さんが、積極的に学校や地域に関わって顔を出すことで、そ

れが地域への愛着につながります。結果的にはお父さんは自分の住んでいる地域を知ることになるんです。

地域にとっては、これまでご隠居さんや校長先生が仕切っていたことに若い勤労者層が入るようになって、地域の活性化に結びつくこととなります。一生懸命やっている先輩の仕事を若い人がかき回してもいけないので、それならば防犯の見回りを若い人がやろうというように、活動を上手に分担したり棲み分けたりするかたちに発展しています。

Q楽しむこと、達成感が得られること、がポイント

紹介された二つの事例を見てみましょう。秋津コミュニティでは、リーダーがお父さんたちをうまくリードしていますね。責任感でがちがちにやるのではなく楽しんでやっている。ボランティアは楽しまないと長続きしないというのは、どのボランティア活動をしている人も感じていることですから。

賀露おやじの会では、メンバーが参加する場が上手に用意されています。表に立つばかりじゃなくて、イベントの裏方には裏方の楽しみ方もあるわけですね。資金集めや、会場の準備とか、経験の中から知らず知らずの内に自分で見つけている。これが落としどころというのをサラリーマンだからご存知なので、それが強みだと思います。

できないと思っていたことが実現できると、それが達成感につながります。お父さんたちもチャレンジャーだと思います。

Q ボランティアコーディネーターの果たす役割は

社協にノウハウやネットワークのあるVコーディネーターがいることを、父親たちの側では知らない。だから知恵を借りれば容易に解決することを、自分だけで考えて苦しんでいることが多いんです。例えばVコーディネーターがちょっと出向いて「何か手伝えることはないか」と聞いてもらえれば、お互いに求めるものはたくさんあるのだし、Vコーディネーターの存在価値も上がるでしょう。すべての団体に関わることはできないけれど、モデル的に関わってその事例をみんなが知ることになればいいのではないのでしょうか。いい情報はすぐに広がっていきますから。

お父さんは自分が何に役立つかわからない、でも潜在能力はたくさんあると思う。それをどうやって引き出すかがVコーディネーターの役割ではないでしょうか。中でもほめ上手というのはVコーディネーターの大切な役割でしょう。満足を得られれば、お父さんは次のステップを自分で考えるようになります。ほめられて安心して自信を持って、次の活動に進んでいくんですから。